（第２号様式）

令和５年３月 11 日

神奈川県教育委員会教育長　殿

県立横浜清陵高等学校　学校長

令和４年度　学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	４年間の目標 （令和２年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （３月 11 日実施）	総合評価（３月 11 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	・新学習指導要領の趣旨や生徒の特性等を踏まえたカリキュラム・マネジメントに取り組む。 ・新しい時代に必要となる資質・能力の育成をめざし、授業改善と探究活動の充実を図る。	①新たな教育課程を踏まえた指導計画に基づく授業づくりとその実践を図る。 ②１人１台端末の導入に係るＩＣＴ利活用の一層の推進を図る。 ③教科・年次による横断的な取組をとおした「総合的な探究の時間」の実践により、探究的な 学びの更なる充実を図る。	①生徒の「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業実践に組織的に取り組む。 ②ICT 推進委員会と連携し、ICT を効果的に活用した授業の実施に取り組む。 ③探究 WG と連携し、「総合的な探究の時間」を通じて長期的な視点での進路意識の醸成及び探究的な学びの充実を図る。	①生徒が主体的に学習に取り組むことができたか。（生徒による授業評価項目 4「身についたことやできるようになったことを実感する」及び項目 5「自らの考えを広げ深めることができた」95％以上） ②１年次生を中心に、端末を授業で活用できたか。（端末活用の頻度が３割以上） ③探究活動を通じて、生徒が自ら課題を見付け、その解決を図る資質・能力の育成につながったか。（生徒による授業評価項目 6「知識をもとに考えをまとめたり課題の解決方法を考えたりすることができた」95％以上）	①組織的な授業改善のための校内研究会を行い、「主体的・対話的で深い学び」について理解を深めた。 ②１年次の「総合的探究の時間」を中心に、授業で活用した。 ③中間評価で項目 6 の評価「3+4」が 1・２年次とも 92％であった。探究 WG の場を活用して観点別評価を作成した。	①引き続き、校内研究会を行い（10～11 月実施予定）、テーマに沿った授業改善を行う。 ②「総合的な探究の時間」以外の教科・科目等での活用方法の事例を集め教職員内で共有する。 ③探究 WG を活用して各年次で独自に作成しているものを学校全体で共有し、２年間の探究の流れを作成する。	①３年間の見通しを持つことが必要なので、学校全体として捉えることができたのは、よい傾向。今後も継続を。 ①公開研究授業については、若手教員だけではなくベテランの教員も行うことで活性化になる。 ①公開研究授業を継続させていく。保育園でも高校同様に主体的で対話的な活動を始めている。 ②ICT 端末はご家庭に負担をかけて購入してもらったものなので、意味のある活用の仕方を考え、しっかりと活用すべき。 ③探究活動を小中学校の段階で身に付けさせたい。探究活動の出口はどこなのか。	①授業づくりについて、校内授業研究を継続する。 他教科も含めて多くの職員が参加し、学校全体の授業力の向上に繋げている。 今後の課題として、成果物の作成および授業研究に係る教科会の設定が挙げられる。 ③総合的な探究の時間（探求的な学びの充実） ワーキンググループの発足により、年次ごとの取組内容の擦り合わせ等を行い、より計画的な活動を推進し、学校全体の取組としての位置づけを強化した。	①校内授業研究体制について見直しを続け、よりよい研究授業を継続する。 授業づくりについて、協議を継続し、今年度の授業改善のテーマを設定する。また、授業研究に係る教科会の設定に向け調整を行う。 ③ワーキンググループとさらに連携をとり探究の取組みについて検証を行いさらによいものを企画する。また、成績評価についても学校全体として統一を図る。
2	（幼児・児童・） 生徒指導・支援	・教育活動全般をとおして生徒の主体性や人間性を高め、社会に貢献できる人材を育成する。 ・生徒理解を深め、個に応じた支援体制を整備し、充実させる	①学校生活を通して規範意識を高めるとともに、部活動や学校行事等を活性化させることにより、生徒の主体性や協調性の向上を図る。 ②教職員同士の情報共有等を通して生徒の抱える問題の早期発見に努め、専門家の活用など個に応じた指導・支援を行う。	①生徒主体の学校行事等を活性化するとともに、部活動加入を促進する。 ②カウンセリング体制を確立し、個別支援を充実させる。 ②生徒情報交換会を複数回実施する。	①充実した学校行事等が行われたか(アンケート等)。 ①部活動加入数が前年度と比較して増加したか。 ②教育相談コーディネーターやスクールカウンセラーの連携状況はどうであったか。（会議等の回数が年３回以上）	①生徒の意見をもとにした学校行事の運営を行うことが出来た。 ①部活動加入数は昨年度と比べて７％減少(559 名から 522 名に減少)した。 ②カウンセリングの振り返りや個別支援が必要な生徒へのケース会議を早期に実施した。 ②年度初めに生徒情報交換会を行った。	①各行事の実行委員等の生徒の主体的な取組を支援する。 ①４月の部活動紹介と部活動見学の方法を改善し、部活動に加入しやすい状況をつくりだす。 ②支援体制を整備し、マニュアルを作成する。 ②支援が必要な生徒の情報共有を年度内に行う必要がある。	①行事の停滞。行事の運営を生徒主体に進めているのは良い。必ずしもコロナ禍前に戻すのではなく、新しい活動に向けた改革として考える必要がある。 ②（心のケアのための）全生徒面談を継続していきたい。担任による生徒面談（心のケア）の実施が良かった。全生徒対象の面談の継続は必要。	②教育相談体制　盤石な体制作りに向け、教育相談コーディネーターを中心に校内の効果的なシステムを再構築した。	①制服のスカート丈が短いこともあるが、冬場はエアコンの効きが悪く、コロナ禍で窓を開ける必要があるため、ジャージの着用を許容せざるを得ない。エアコンの改修により改善されると良い。女子のスカート等についての指導は男性教員からは言いにくい側面もあるので、職員全体で指導していく ②教育相談体制を効果的に行うため、各年次に相談係を配置していきたい。

3	進路指導・支援	・学校外の教育力の活用や個別指導を充実させ、個々の生徒のキャリア意識を高め、希望する進路実現を図る。	①上級学校等への入学に向けた対策の研究を深め、組織的かつ計画的な進路指導をできるだけ早い段階から行う。 ②外国につながりのある生徒の進路実現を図るため、外部機関との連携強化を進める。	①３年間を見通したキャリア教育の流れを作成する。また、学校外の教育力の活用方法を組織的に計画する。 ②多文化教育コーディネーターや在県等支援チームとの連携を図ることにより外国につながりのある生徒の進路実現を目指す。	①グループとして３年間を見通したキャリアプランが作れたか。 ②外国につながりのある生徒の希望進路を実現できたか。（第１志望の 60%以上実現）	①現在のキャリア教育の流れを把握し、問題点・改善点について洗い出しを行った。また、３年間を見通したキャリア教育の流れを作れた。	①キャリア教育を実行していくための具体的なプランと実施時期について具体化をする。	①一般受験はあまりせず、安全志向に推薦で行く生徒が多いのではないか。 ①推薦で入学する生徒が多いため、偏差値の設定が難しくなると思う。	②在県外国人生徒支援 在県外国人生徒支援チームが本格的に稼働したが、より一層の教職員の意識改革が必要である。	①外部模試等を活用して全国での位置を知ることで目標を明確に持たせ一般受験の生徒を増やす。 ②卒業生等に大学受験の体験を話す機会をもうけることにより生徒・教員の意識改革をする。
4	地域等との協働	・地域や保護者等と連携・協働を図り、信頼され開かれた学校づくりを推進する。	①地域の行事や清掃活動等に積極的に参加し、生徒の社会参加への意欲を高める。	①生徒の地域清掃活動への積極的な参加を通じて、地域における個々の役割を実感させる。	①生徒が地域清掃活動に積極的に参加できたか。（アンケート等）	①清水ヶ丘保育園ほかの保育園ボランティア活動を通して、園児とふれあい、地域と連携した活動ができた。 地域清掃活動を南区地域振興課と連携し、10～12 月にかけて２・３年次で実施した。	①生徒が地域を身近に感じられる南まつりへの参加、保育園ボランティアなど、地域に根ざした社会貢献活動への積極的な参加につなげていく。	①コロナ禍で新しく取り組んだことに対するデメリットは時間をかけて解決しなければならない。	①近隣の小中学校（蒔田中学校・南太田小学校）との絆を育成し、地域との協同を拡大した。 ①今年度まではコロナ禍のため、行事等においても地域の人を呼ぶことができなかったが来年度は規制がなくなると考えている。	①大勢いるとボランティアではなく、ただ掃除しているという印象が強くなる。 ①保育園ボランティアについて進路に関わることもあり、生徒の意識が高いので来年度は参加人数を増やしたい。 ①地域祭りへの参加について生徒にとって地域交流へのモチベーションとなるように、活動の幅を広げていきたい。
5	学校管理 学校運営	・社会の教育ニーズに対応しながら、安心して学ぶことのできる教育環境をつくり、積極的に情報を発信する。 ・職員のワークライフバランスを推進するため、協働意欲を高め、校務の効率化を図る。	①学校説明会や学校ホームページ等を利用し、学校の魅力と特色を積極的に発信する。 ②教職員研修会等の更なる充実を図り、組織力の向上につなげる。	①ＳＮＳの利点を活用して、本校の魅力や特色を積極的に発信する。 ①学校ホームページの更新を迅速に行い、広報手段として適切な運用を図る。 ②毎月 1 回事故防止会議を実施し、全職員で事故不祥事ゼロを目指す。また校内研修会を設け、職員の資質・能力の向上を図る。	①ＳＮＳの利点を活用した情報発信の新たな仕組みを構築できたか。 ②事故不祥事ゼロを実現できたか。 ②校内研修会を実施したか。（実施回数３回以上）	①学校見学・部活動見学では、参加の申込みなどで、積極的にインターネットを利用して、多く参加者が得られた。参加者アンケートでは、高い満足感が得られている。 ②毎月の事故防止会議に加え、５月には「わいせつ事案根絶に向けて」動画視聴による研修会を実施した。他に朝の打合せでも、その時々の行事に応じた事故防止の呼びかけを行うことができた。	①今後、学校の魅力の発信など、情報発信手段としての、インターネットの積極的な活用を進めていく。 ②コロナ禍の影響などにより、新たな対応が必要になってきている。教職員の共通理解を徹底する必要がある。	①広報活動について、対面型とインターネット利用との効果についての比較はどうか。 ②働き方改革による部活動の時間超過については、再考が必要。	①効果としては、対面のほうが良い。生徒による活動(実物)を見たほうが中学生への印象が良い。ただし今後もインターネットの活用は継続していく。また、広報委員生徒の活躍が目立つ。生徒が学校説明会での司会をしたり、部活動の演技を披露したりすることで、そこに魅力を感じてくださる方々が多い。 ②年職員会議前の事故防止会議、打ち合わせ等での呼びかけを定期的に実施した。 推薦入試の申込みの際、登録者に漏れが生じたため、提出書類置き場を設け、多くの目で確認できるよう工夫した。細かい部分も連絡を密にし、大きな事故につながらないよう素早い対応ができた。	①学校の活動が見えるように映像や画像をインターネットで公表していく。 ①部活動だけの緩い学校というイメージを払拭したい。新しい学校案内も落ち着いたものに一新し、説明会でも生徒の活動を全面に出してきた。今後も学校の魅力を伝える方法を模索していく必要がある。 ②事故はだれにでも起こることを念頭に置き、些細なことでも連絡をしやすい雰囲気づくりを心掛け、速やかに対処することに心がける。その後、職員で問題とその解決策を共有することが必要である。